

申命記第二十九章 自九至二十二節

九 然れ汝らこの契約の言を守りてこれを行ふべし然れバ汝らの凡て爲すこは此に祥ならん 汝らみな
 十 今日なるがら神ハバの前に立つ即ち汝らの首領等ならんがら支派なんがら長老等および故らの故
 十一 伯等あとイשראלの一切の人 汝らの小者等汝らの妻ならびに汝らの蠻の中にある客旅など凡て汝
 十二 らために新を割る者より水を汲む者おいたるまで皆エホバの前を立て 汝の神ハバの契約に入ら
 十三 し又汝の神ハバの汝おひかひて今日なしたまふところの誓に入らんとす 然レエホバ言ひ
 十四 どくまた汝の先祖アブラハムイサクヤコブに誓ひしごとく今日なるがら立て己の民となりしかつから汝
 十五 の神と語りたまはん 我らいたまふ汝らと而已此契約と誓を結ぶにあらす 今且此にてわれらの神ハバ
 十六 の前を我らとともにはたち居ざる者どもを結ぶなり 我
 十七 べん如何にエシマツの地に住むるし如何に國々を通り來りてか汝らこれを知り 汝らみな木石金銀
 十八 にて造れる憎むべき物および偶像の國々あるを見たり 然レ故らの中に今日我が心お我らの神
 十九 ハバを離れて其等の國々の神に往て事ふる男女宗族支派などあるべからず又なんぢらの中お甚らした
 二十 り萬旗を生むる根あるべからず 却る人ハバの呪詛の言を聞もうの心自ら幸福なりと思ひて言ハ
 二十一 わが心を酬へばしめて事をする者も憐れを蒙りて禍難の者を除くにいたらん 是の
 二十二 とき人エホバからたまはしめて還てエホバの怒りと嫉妬の火が上に燃えまたこの書か
 二十三 りしたる律法にあらはしほつ以に之の人の名を天に下より抹さるべし 且
 二十四 なはちイשראלの諸の支派の中よりその人を分ちてこれに災禍を下しての律法の書かきしたる契約
 二十五 中の諸の呪詛のごとくたまはせん 汝等の後に起る汝らの子孫の代の人および遠き國より來る客旅の

九 然れ汝らこの契約の言を守りてこれを行ふべし然れバ汝らの凡て爲すこは此に祥ならん 汝らみな
 十 今日なるがら神ハバの前に立つ即ち汝らの首領等ならんがら支派なんがら長老等および故らの故
 十一 伯等あとイשראלの一切の人 汝らの小者等汝らの妻ならびに汝らの蠻の中にある客旅など凡て汝
 十二 らために新を割る者より水を汲む者おいたるまで皆エホバの前を立て 汝の神ハバの契約に入ら
 十三 し又汝の神ハバの汝おひかひて今日なしたまふところの誓に入らんとす 然レエホバ言ひ
 十四 どくまた汝の先祖アブラハムイサクヤコブに誓ひしごとく今日なるがら立て己の民となりしかつから汝
 十五 の神と語りたまはん 我らいたまふ汝らと而已此契約と誓を結ぶにあらす 今且此にてわれらの神ハバ
 十六 の前を我らとともにはたち居ざる者どもを結ぶなり 我
 十七 べん如何にエシマツの地に住むるし如何に國々を通り來りてか汝らこれを知り 汝らみな木石金銀
 十八 にて造れる憎むべき物および偶像の國々あるを見たり 然レ故らの中に今日我が心お我らの神
 十九 ハバを離れて其等の國々の神に往て事ふる男女宗族支派などあるべからず又なんぢらの中お甚らした
 二十 り萬旗を生むる根あるべからず 却る人ハバの呪詛の言を聞もうの心自ら幸福なりと思ひて言ハ
 二十一 わが心を酬へばしめて事をする者も憐れを蒙りて禍難の者を除くにいたらん 是の
 二十二 とき人エホバからたまはしめて還てエホバの怒りと嫉妬の火が上に燃えまたこの書か
 二十三 りしたる律法にあらはしほつ以に之の人の名を天に下より抹さるべし 且
 二十四 なはちイשראלの諸の支派の中よりその人を分ちてこれに災禍を下しての律法の書かきしたる契約
 二十五 中の諸の呪詛のごとくたまはせん 汝等の後に起る汝らの子孫の代の人および遠き國より來る客旅の

申命記第二十九章 自六十四至二十九章八節

六十四 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 六十五 た汝の足の跡を休むる所を得ず其處にてエホバ汝をして心慄き目昏るに精亂れしめたまはん 汝の生命
 六十六 ハ細き糸に懸るが如く汝に見ゆ汝の夜晝と亦く恐怖をいだき汝の生命おぼつかさじと思へん 汝の心は懼
 六十七 る所より見たる目に見る所より朝にかけて言ハ鳴呼分分さらバ善らんをまた分分にかけてと言ハ鳴
 六十八 呼朝ならバ善らんとす エホバなんぢらちを舟にのせ世の昔が汝に告て汝ハ再びこれを見ることあらば
 六十九 言たるる路より汝をエシマツに曳ゆきたまはん彼處にて人汝らを買て汝らの敵の奴婢となさん汝ら
 七十 買ふ人もあらば
 七十一 六 此の地よりの極よりかの極までの國々の中に汝を散らしたまはん故ら其處にて
 七十二 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 七十三 六十四 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 七十四 六十五 た汝の足の跡を休むる所を得ず其處にてエホバ汝をして心慄き目昏るに精亂れしめたまはん 汝の生命
 七十五 六十六 ハ細き糸に懸るが如く汝に見ゆ汝の夜晝と亦く恐怖をいだき汝の生命おぼつかさじと思へん 汝の心は懼
 七十六 六十七 る所より見たる目に見る所より朝にかけて言ハ鳴呼分分さらバ善らんをまた分分にかけてと言ハ鳴
 七十七 六十八 呼朝ならバ善らんとす エホバなんぢらちを舟にのせ世の昔が汝に告て汝ハ再びこれを見ることあらば
 七十八 六十九 言たるる路より汝をエシマツに曳ゆきたまはん彼處にて人汝らを買て汝らの敵の奴婢となさん汝ら
 七十九 七十 買ふ人もあらば
 八十 七十一 六 此の地よりの極よりかの極までの國々の中に汝を散らしたまはん故ら其處にて
 八十一 七十二 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 八十二 七十三 六十四 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 八十三 七十四 六十五 た汝の足の跡を休むる所を得ず其處にてエホバ汝をして心慄き目昏るに精亂れしめたまはん 汝の生命
 八十四 七十五 六十六 ハ細き糸に懸るが如く汝に見ゆ汝の夜晝と亦く恐怖をいだき汝の生命おぼつかさじと思へん 汝の心は懼
 八十五 七十六 六十七 る所より見たる目に見る所より朝にかけて言ハ鳴呼分分さらバ善らんをまた分分にかけてと言ハ鳴
 八十六 七十七 六十八 呼朝ならバ善らんとす エホバなんぢらちを舟にのせ世の昔が汝に告て汝ハ再びこれを見ることあらば
 八十七 七十八 六十九 言たるる路より汝をエシマツに曳ゆきたまはん彼處にて人汝らを買て汝らの敵の奴婢となさん汝ら
 八十八 七十 買ふ人もあらば

六十四 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 六十五 た汝の足の跡を休むる所を得ず其處にてエホバ汝をして心慄き目昏るに精亂れしめたまはん 汝の生命
 六十六 ハ細き糸に懸るが如く汝に見ゆ汝の夜晝と亦く恐怖をいだき汝の生命おぼつかさじと思へん 汝の心は懼
 六十七 る所より見たる目に見る所より朝にかけて言ハ鳴呼分分さらバ善らんをまた分分にかけてと言ハ鳴
 六十八 呼朝ならバ善らんとす エホバなんぢらちを舟にのせ世の昔が汝に告て汝ハ再びこれを見ることあらば
 六十九 言たるる路より汝をエシマツに曳ゆきたまはん彼處にて人汝らを買て汝らの敵の奴婢となさん汝ら
 七十 買ふ人もあらば
 七十一 六 此の地よりの極よりかの極までの國々の中に汝を散らしたまはん故ら其處にて
 七十二 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 七十三 六十四 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 七十四 六十五 た汝の足の跡を休むる所を得ず其處にてエホバ汝をして心慄き目昏るに精亂れしめたまはん 汝の生命
 七十五 六十六 ハ細き糸に懸るが如く汝に見ゆ汝の夜晝と亦く恐怖をいだき汝の生命おぼつかさじと思へん 汝の心は懼
 七十六 六十七 る所より見たる目に見る所より朝にかけて言ハ鳴呼分分さらバ善らんをまた分分にかけてと言ハ鳴
 七十七 六十八 呼朝ならバ善らんとす エホバなんぢらちを舟にのせ世の昔が汝に告て汝ハ再びこれを見ることあらば
 七十八 六十九 言たるる路より汝をエシマツに曳ゆきたまはん彼處にて人汝らを買て汝らの敵の奴婢となさん汝ら
 七十九 七十 買ふ人もあらば
 八十 七十一 六 此の地よりの極よりかの極までの國々の中に汝を散らしたまはん故ら其處にて
 八十一 七十二 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 八十二 七十三 六十四 汝も汝の先祖等も知ざりし木々石なる他の神々に事へん 國々の中におりて汝は安寧を得ずま
 八十三 七十四 六十五 た汝の足の跡を休むる所を得ず其處にてエホバ汝をして心慄き目昏るに精亂れしめたまはん 汝の生命
 八十四 七十五 六十六 ハ細き糸に懸るが如く汝に見ゆ汝の夜晝と亦く恐怖をいだき汝の生命おぼつかさじと思へん 汝の心は懼
 八十五 七十六 六十七 る所より見たる目に見る所より朝にかけて言ハ鳴呼分分さらバ善らんをまた分分にかけてと言ハ鳴
 八十六 七十七 六十八 呼朝ならバ善らんとす エホバなんぢらちを舟にのせ世の昔が汝に告て汝ハ再びこれを見ることあらば
 八十七 七十八 六十九 言たるる路より汝をエシマツに曳ゆきたまはん彼處にて人汝らを買て汝らの敵の奴婢となさん汝ら
 八十八 七十 買ふ人もあらば

地の災禍を見またエホバがこの地に流行せたまはれ病を見言どころわらん即ち彼らを見るにその全地ハ疏責となり隣となり且塵土となり種も薄れす産する所も亦く何の草もの上に生せずして彼の昔エホバがその震怒と怨恨をもて毀ちたまひしツトエモアラフアセボイムの毀れたると同じかるべし
 且彼の諸人應へて曰ん彼らハこの先祖たちの神エホバがエツトの地より彼らを導きだして彼らと結びたるその契約を棄てて往て己の讒言を棄てて往て他の神々に事へてこれを拜みたるが故なり是をもてエホバの地にむかひて震怒を發してこの書を著したる諸の災禍をふれに下し而してエホバ震怒と怨恨と大なる憤怒をもて彼らをしてこの地より拔どりてこれを他の國にお投やりその無今日の如し
 應微たる事ハ我らの神エホバに属する者なりまた顯露せられたる事ハ我らと我らの子孫と我らとを共に
 この律法の諸の言を行えしむる者なり
 我が汝らの前に陳たるこの諸の祝禮と呪詛の事すでに汝に臨み汝の神エホバに遷やら
 れたる諸の國々において此事を心に考ふるわたり汝と汝の子等どもに汝の神エホバに起かへり我ら
 今日なんぢに命する所に至たく猶かひて心をつくし精神をつくしてエホバの言に聽きたるは汝
 エホバの汝の悖擄を解て汝を憐れみ汝の神エホバが汝を贖みたる汝を散らし國々より汝を集めたるは汝
 たどひ天涯を遷やらるゝとも汝の神エホバが其處より汝を集め其處より汝を擧ぐかへりたまはれ汝の神
 エホバが汝を去ての先祖の有らし地に歸らしめたまふて汝また汝を有つにいたらんエホバまた汝を善
 し汝を増て汝の先祖よりも衆からまめたまはん而して汝の神エホバが汝の心と汝の子等の心に對禮を施

ヤ 申命記 第三十章 六
 申命記 第三十章 七
 申命記 第三十章 八
 申命記 第三十章 九
 申命記 第三十章 十
 申命記 第三十章 十一
 申命記 第三十章 十二
 申命記 第三十章 十三
 申命記 第三十章 十四
 申命記 第三十章 十五
 申命記 第三十章 十六
 申命記 第三十章 十七
 申命記 第三十章 十八
 申命記 第三十章 十九
 申命記 第三十章 二十
 申命記 第三十章 二十一
 申命記 第三十章 二十二
 申命記 第三十章 二十三
 申命記 第三十章 二十四
 申命記 第三十章 二十五
 申命記 第三十章 二十六
 申命記 第三十章 二十七
 申命記 第三十章 二十八
 申命記 第三十章 二十九
 申命記 第三十章 三十

こし汝をして心を善くし精神をつくして汝の神エホバを愛せしめ斯して汝が生命を得させたまふべし汝
 の神エホバがまた汝の敵と汝を惡み攻る者どもこの諸の災禍をかうりせたまはん 然る故らり再びエホ
 バの言に聽きたるがひ我が今日なんぢらに命するの一切の誠命を行ふにいたらん 然る時ハ汝の神エホ
 バが汝をして汝が手をかくる諸の物と汝の胎の産と汝の家畜の産と汝の地の産に富をめて汝を善したまは
 せん即ちエホバの先祖たちを憐れびて汝を憐れびて汝を善したまはん 是ハ汝の神エホバ
 の言に聽きたるがひ此律法の書を著せられたる誠命と法度を守り心をつくし精神をつくして汝の神エホバ
 歸するおよびなり 我ら今日なんぢらに命する誠命は汝が理會がたき者にあらざれば汝に違き者わら
 ず 是ハ天お在ならぬ汝が誰か我らのため天のばりてこれを我らに持たざり我らにこれを開きて
 行はせんかといふおおまをせず 是は海の外わらぬ汝が誰か我らのために海をわたりゆきて
 之れを我らに持きたり我らにこれを開きて行はせんかといふおおまをせず 是言は甚だ汝を近くして汝の口
 にあり汝の心にあり汝に命するに汝の神エホバを愛しよの道に歩みよの誠命と法度と律法とを守ること命
 するなり然るに汝が汝の神エホバが汝が往て獲るどこの地に汝を
 祀禮たまふべし 然る故らもし心を以るがへして聽従がはき勝はれて他の神々に拜みまたこれに事へな
 せん 我今日汝らに告ぐ汝らに必ず汝が汝の神エホバを愛しよの道に歩みよの誠命と法度と律法とを守ること命
 することを得ざらん 我今日天と地を呼て證とす我の生命と死かよび祝禮と呪詛とを汝らの前に置り汝
 生命をえらばんと然るに汝の子孫生存らふことを得らん 即ち汝の神エホバを愛してその言を聽き

申命記 第三十章 一
 申命記 第三十章 二
 申命記 第三十章 三
 申命記 第三十章 四
 申命記 第三十章 五
 申命記 第三十章 六
 申命記 第三十章 七
 申命記 第三十章 八
 申命記 第三十章 九
 申命記 第三十章 十
 申命記 第三十章 十一
 申命記 第三十章 十二
 申命記 第三十章 十三
 申命記 第三十章 十四
 申命記 第三十章 十五
 申命記 第三十章 十六
 申命記 第三十章 十七
 申命記 第三十章 十八
 申命記 第三十章 十九
 申命記 第三十章 二十
 申命記 第三十章 二十一
 申命記 第三十章 二十二
 申命記 第三十章 二十三
 申命記 第三十章 二十四
 申命記 第三十章 二十五
 申命記 第三十章 二十六
 申命記 第三十章 二十七
 申命記 第三十章 二十八
 申命記 第三十章 二十九
 申命記 第三十章 三十

ホバはまたその子ヨエラに命じて曰く汝ハイスラエルの子孫を我が其に誓ひし地に導きいるべきが故に心を強くしかつ勇め我なんぢどもに在べしとモ一セこの律法の言をこゝく書に書するすこを終たる時 モ一セエホバの契約の櫃を擧とこのレヒ人に命じて言けるこの律法の書をとりて汝らの神エホバの契約の櫃の傍にこれを置き之をして汝にむかひて証をなす者たらしめよ我なんぢの憐れ事と頑梗なるを知る福よ今日わが生存して汝らどもに在る間すら汝らハエホバに憐れり況てわが死たる後に於いてをや 汝らの諸支派の長老等よ及び彼伯たちを吾詩に集めよ我これらの言をかれらに語り開せ天と地とを呼てかれらに証をなさしめん 我え我が死たる後に汝ら必ず我の事を言へば 行ひ我が汝らに命ぜし遺を離れん而して後の日に災害あんぢらに臨まん是なんぢらエホバの惡を觀たす事をおこす事をおこす汝らの手の行爲をもてエホバを怒らするによりてなり かくてモ一セイスラエルの全會衆にこの歌の言をこゝく語り開せたり

第二十三節 天よ耳を傾けよ我語らん地よ吾口の言を聴け 汝が教ひ雨の降るがごとく吾言の露の如くがごとく露の若剣の上よ入るごとく細雨の青剣の上よくだるが如し 我ハエホバの御名を頌揚ん我らの神に汝ら榮光を歸せよ エホバは磐にまじまじしてその御行爲の完くその道ハミま正しまた眞實なる神にまじまじして惡きどころ無し只正くして直くいます 彼らハエホバにむかひて惡き事を爲てなふ者にてその子にわらふ者只これが瑞となるのみ其人と爲り耶憐にして曲れり 愚かして智慧なき民よ汝らがエホバに鞭ゆること是のごとくなるかエホバハ汝の父にして汝を贖ひまた汝を遣り汝を建たすまや昔の日を憶え過かし世代の年を念へよ汝の父に問へし汝汝に而さん汝の中の年老も問へし彼ら汝を語ら

一五九 申命記三二章一節
一六〇 申命記三二章二節
一六一 申命記三二章三節
一六二 申命記三二章四節
一六三 申命記三二章五節
一六四 申命記三二章六節
一六五 申命記三二章七節
一六六 申命記三二章八節
一六七 申命記三二章九節
一六八 申命記三二章十節
一六九 申命記三二章十一節
一七〇 申命記三二章十二節
一七一 申命記三二章十三節
一七二 申命記三二章十四節
一七三 申命記三二章十五節
一七四 申命記三二章十六節
一七五 申命記三二章十七節
一七六 申命記三二章十八節
一七七 申命記三二章十九節
一七八 申命記三二章二十節
一七九 申命記三二章二十一節
一八〇 申命記三二章二十二節
一八一 申命記三二章二十三節
一八二 申命記三二章二十四節
一八三 申命記三二章二十五節
一八四 申命記三二章二十六節
一八五 申命記三二章二十七節
一八六 申命記三二章二十八節
一八七 申命記三二章二十九節
一八八 申命記三二章三十節
一八九 申命記三二章三十一節
一九〇 申命記三二章三十二節

らん至高者人の子を四方に散して萬の民にその產業を分ちイスラエルの子孫の懲に照して諸の民の境界を定めたまへり エホバの分りの民にしてヤコブのの產業たり エホバこれを荒野の地に見これに獸の鳴る曠野に遇りかてみて之をいたり眼の珠のごとくにこれを護りたまへり 鷹ののの巢を喚起しそのの上に翱翔せどくエホバその羽を展て彼らを載せしめてこれを負たまへり エホバハ只獨にてかれを導きたまへり別神ハこれごとくもならずき エホバかれに地の高處を乘りばせ田園の産物を食はせ石の中より蜜を吸し蝨蟻の中より油を吸えよ 牛の乳羊の乳蓋羊の脂バシレイより出る牡羊牡山羊かよび小麦の最も佳き者をもてこれに食せたまひき汝はまた葡萄の汁の紅き酒を飲り 然るにエホバは肥つて陽とを爲す汝は肥たりて大きくなり已を遣りし神を棄て已が救拯の誓を輕んず 彼らと別神をもて之が嫉妬をおこし憎むべき者をもて之が震怒を惹く 彼らが犠牲をさぐる者鬼わして神にわらま彼らが譴ざりし與神近頃新に出たる者汝らの遠つ親の畏まざりし者なり 汝を生じ誓をた汝てこれを棄て汝を遣りし神をバ汝てきを忘る エホバてれを見ろの男子女子を怒りてこれを棄たまふ 子なはち曰たまはく我わが面をかれらに隠さん我かれらの終を觀ん彼らハみ不肯き悖る繼の者眞實のらざる子等あり 彼らと神ならぬ者をもて我に嫉妬を起させ惡き者をもて我を怒らせられたる民ならぬ者をもて彼らに嫉妬を起させ愚かる民をもて彼らを怒らせん 即ちわが震怒によりて火燃いで深き陰府に燃いたりまた地とろの産物をと燒つてし山々の基をもやさん 我禮儀をかれらの上に積かさね吾失をかれらにむかひて射つさん 彼らハ饑て瘦あどるへ熱の病患と惡き瘡とによりて滅びん我またかれらをして獸の齒にかくらえ地に匍ふ者あたらしめん 外にハ劍内に之を恐懼わりて少き男をも少

一八八 申命記三二章一節
一八九 申命記三二章二節
一九〇 申命記三二章三節
一九一 申命記三二章四節
一九二 申命記三二章五節
一九三 申命記三二章六節
一九四 申命記三二章七節
一九五 申命記三二章八節
一九六 申命記三二章九節
一九七 申命記三二章十節
一九八 申命記三二章十一節
一九九 申命記三二章十二節
二〇〇 申命記三二章十三節
二〇一 申命記三二章十四節
二〇二 申命記三二章十五節
二〇三 申命記三二章十六節
二〇四 申命記三二章十七節
二〇五 申命記三二章十八節
二〇六 申命記三二章十九節
二〇七 申命記三二章二十節
二〇八 申命記三二章二十一節
二〇九 申命記三二章二十二節
二一〇 申命記三二章二十三節
二一一 申命記三二章二十四節
二一二 申命記三二章二十五節
二一三 申命記三二章二十六節
二一四 申命記三二章二十七節
二一五 申命記三二章二十八節
二一六 申命記三二章二十九節
二一七 申命記三二章三十節
二一八 申命記三二章三十一節
二一九 申命記三二章三十二節

に引かへて来たる敵の手をもて己のために戦ふに願くは汝これをして敵おわたらふめたむ
 レビに於て言ふ汝のトビムとウラムと汝の聖人に歸す汝かつてサにて彼を試みメラの氷
 の邊おてかれと争をへり 彼れその父また其の母につきて言ひ我れこれを見ずと又彼と己の兄弟を
 讒言すまた自己の子等を離れみざりき是ハ人々其の言に遵ふ以汝の契約を守りてあり 彼らハ汝の式例をや
 コに教へ汝の律法をイスラエルに教へ又香を汝の鼻の前になへ燔祭を汝の壇の上にささぐ
 と彼の所有を祝し彼が手の作爲を憐てびて細きたまへ又起てこれに逆らふ者ぞこれを惡む者との腰を推
 きて復起あがることあたばざらふめたまへ ンヤミツに於て言ひエホバの愛する者安らかにエホバ
 とともにあり日々其の庇護をかうむりてその肩の間に居ん ヨセフに於て言ひ願くは其の地エホ
 バの祝福をかうむらんことを即ち天の寶物なる露漚の底なる氷 日によりて産する寶物月によりて生さ
 る寶物 古山の嶺の寶物 老嶺の寶物 地の寶物 地中の寶物 柴の中に居たまひし者の恩
 惠をよセフの首に臨みその兄弟と別になりたる者の頂に降らん 彼の年の首出たるの身に榮光ありて
 うの角ハ兎の角のごとく之をもて國々の民を衝らんして直に地の四方の極にまで至る是ハエホバの
 萬萬是ハマヤナセの千千なり セザルンに於て言ひ言ハセザルンよ汝れ外に出て快樂を得よ イツサカによ
 汝の家にて居て快樂を得よ 彼らハ國々の民を出に招き其處にて義の犧牲を獻げん又海の中に盈る物を得
 て食ハ沙の中に藏れたる物を得て食せん ガドに於て言ひ言ハセザルンよ汝れ外に出て快樂を得
 べハ獅子のごとく伏し腹ご首の頂を擡裂ん 彼ハ初穂の地を自己のために選べり其處にハ大將の
 分もてもれり 彼ハ民の首領等どもに至りイサエラエルどもにエホバの公義と審判をわけてなへり 三

カ 創九八
 分 創九八
 方 創九八
 一 創九八
 二 創九八
 三 創九八
 四 創九八
 五 創九八
 六 創九八
 七 創九八
 八 創九八
 九 創九八
 十 創九八
 十一 創九八
 十二 創九八
 十三 創九八
 十四 創九八
 十五 創九八
 十六 創九八
 十七 創九八
 十八 創九八
 十九 創九八
 二十 創九八
 二十一 創九八
 二十二 創九八
 二十三 創九八
 二十四 創九八
 二十五 創九八
 二十六 創九八
 二十七 創九八
 二十八 創九八
 二十九 創九八
 三十 創九八
 三十一 創九八
 三十二 創九八
 三十三 創九八
 三十四 創九八
 三十五 創九八
 三十六 創九八
 三十七 創九八
 三十八 創九八
 三十九 創九八
 四十 創九八
 四十一 創九八
 四十二 創九八
 四十三 創九八
 四十四 創九八
 四十五 創九八
 四十六 創九八
 四十七 創九八
 四十八 創九八
 四十九 創九八
 五十 創九八

一 斯てモ一セモアの平野よりホ山にのぼりエリコに對するヒガの嶺にいたりけれ
 ペエホバ之にギレバテの全地を奪つて見しニ ナフラリの全部エフライムとマナセの地およびユダの全
 地を西の海まで見し 南の地と橡樹の邑なるエリコの谷の原をソアまで見したまへり 而してエホバ
 へに言たまひける 我ハアフラハイムとマナセの地を汝の子孫にあたへんとて誓ひたりし
 地ハ是あり 我ハ汝を去て之を汝の目に觀て之を得せ法む然て汝ハ彼處に濟りゆくことを得ず 斯の
 ごとくエホバの僕モ一セハエホバの言の如くモアの地に死し 二 エホバベラヤに對するモアの
 地の谷にこれを書り給へり 今日までその墓を知る人なし 三 モ一セハの死する時百二十歳ありしがその
 目ハ眼をまするの氣力ハ衰へり 四 イサエラエルの子孫モアの地において三十日のおひだモ一セのため

を踐ん
 敵ハ汝の前より驅せらひて言たまふ滅ばせよと イサエラエルの安然に住をりヤコフの泉ハ穀と酒との
 多き地に獨り在らん 五 汝の天ハ天の露をこれに降すべし イサエラエルよ汝ハ幸福あり誰か汝のごとくエホバ
 に報はれし民たらん 六 エホバハ汝を護る楯汝の榮光の劍あり汝の敵ハ汝に語ひ服せん 七 汝ハかゝるの富處
 を踐ん
 子等よりも幸福なり 汝ハ其兄弟等にて之を惠み其の足に膏の中に寝さん 八 汝の門門之鐵のごとく 劍
 のごとく 汝の能力ハ汝が日々に請むるごとく 九 汝ハ全能の神のごとき 者之外に無し 是
 ハ天に於て 汝を助けて雲に憑てその威光をあらたせたまふ 永久に在す 神ハ住所なり 下にハ永遠の麗あり
 人ハ汝の前より驅せらひて言たまふ滅ばせよと イサエラエルの安然に住をりヤコフの泉ハ穀と酒との
 多き地に獨り在らん 十 汝の天ハ天の露をこれに降すべし イサエラエルよ汝ハ幸福あり誰か汝のごとくエホバ
 に報はれし民たらん 十一 エホバハ汝を護る楯汝の榮光の劍あり汝の敵ハ汝に語ひ服せん 十二 汝ハかゝるの富處
 を踐ん

一 申二七
 二 申二七
 三 申二七
 四 申二七
 五 申二七
 六 申二七
 七 申二七
 八 申二七
 九 申二七
 十 申二七
 十一 申二七
 十二 申二七
 十三 申二七
 十四 申二七
 十五 申二七
 十六 申二七
 十七 申二七
 十八 申二七
 十九 申二七
 二十 申二七
 二十一 申二七
 二十二 申二七
 二十三 申二七
 二十四 申二七
 二十五 申二七
 二十六 申二七
 二十七 申二七
 二十八 申二七
 二十九 申二七
 三十 申二七
 三十一 申二七
 三十二 申二七
 三十三 申二七
 三十四 申二七
 三十五 申二七
 三十六 申二七
 三十七 申二七
 三十八 申二七
 三十九 申二七
 四十 申二七
 四十一 申二七
 四十二 申二七
 四十三 申二七
 四十四 申二七
 四十五 申二七
 四十六 申二七
 四十七 申二七
 四十八 申二七
 四十九 申二七
 五十 申二七